

乳幼児期の低出生体重児の発達と母子支援に関する 臨床心理学的研究

中島, 俊思

<https://doi.org/10.15017/1654971>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 中島 俊思

論 文 名 : 乳幼児期の低出生体重児の発達と母子支援に関する臨床心理学的研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、乳幼児期の低出生体重児の社会的発達を明らかにするとともに、低出生体重児（以後LBW児）の母親の主観的体験を検証し、母子の育ちへの臨床心理学的な支援技法を検討することを目的とした研究をおこなった。

第1章では、LBW児の発達と母子支援に関する今までの知見を概観した。本邦における低出生体重児の割合とフォローアップ体制について報告し、乳幼児期の社会性の発達および学童期までの各領域の発達傾向に関する研究動向を記した。またLBW児を育てる母親の心理特性と支援についても、報告した。

第2章では、18～20か月時点における社会性の発達について、共同注意行動や気質の特徴から検討した。18か月児の母親回答式のM-CHATを用いた検証では、LBW児は「視線追随」や「物の提示」など共同注意行動のいくつかの領域で未獲得であることが明らかになった。これらの行動獲得には、未熟性に関連する脳病変などの医療的リスクの有無が関連していた。また、共同注意の観察ツールであるESCSを用いた20か月の検証においても、“指さし追随”や“自発的共同注意”で苦手さが明らかになった。LBW児の共同注意と関連する気質的傾向としては、新奇場面や新規他者への警戒といった気質的特性があげられた。

第3章では、就園前の3歳児健診における社会性の発達と、就園後の保育園におけるLBW児の発達プロセスを検証した。3歳児健診で母親回答式のPARS短縮版を用いた検証から、36か“会話の持続”や“言葉の獲得”で低い一方で、36か月時点では第2章で差異あきらかになったような“指さし”のような行動はLBW児も獲得していることが明らかになった。既に診断を受けたASD児と同じ程度にLBW児に苦手さがみられたのは“同年齢他児への興味関心”であった。就園後における発達プロセスの検証では、出生体重2000g未満のMLBW児を対象に、保育士による発達評価システムをもちいて検証した。横断的調査からは、“粗大運動”“微細運動”“身辺自立”などの運動領域で年少から年長へと学年があがるにつれ、標準体重児群との差異が解消されていくことがあきらかになった。一方で、“落ち着き”や“順応性”など適応行動に関する領域では年中時点で標準体重児群との差が開いたり差が解消せずに残ったりするような傾向があきらかになった。縦断的コホート調査でも同様に“落ち着き”や“注意力”といった領域では、年長時点でも差が残存する傾向が明らかになった。

第4章では、NICU入院を体験した母親の主観的体験と、養育行動に関する検証をおこなった。NICU入院を体験した母親は産褥期の産後一か月時点において、一般産科群と比較して抑うつ傾向に差異はなく、自己不全感も有意に低い傾向がみられた。一方で子どもへの愛着意識では、“親しくしたいと思う”“抱くのが楽しい”といった接近欲求は高い一方で、“私を必要としている”“赤ちゃんの人格がわかる”“赤ちゃんの望んでいることがわかる”といった項目でNICU群の低さがみら

れた。さらに NICU 入院を経験した母親を対象に、子どもが 22 カ月時点になった時点で追跡調査となる家庭訪問調査を実施した。22 カ月時点で、母親が調査者に語る主観的体験と子どもと関わる養育行動について検証した。妊娠出産や NICU 入院など半構造化面接から評定した母親の語りの形式は、実際に相互交渉場面で子どもにせしめず養育行動と強い連続性がみられた。NICU 入院を経験した母親のなかでも LBW 児の母親は、語りと養育行動の双方で特徴的なパターンを示した。

第 5 章では、第 4 章の母親を対象にした半構造化面接の臨床心理学的な支援技法としての利点と限界を踏まえて、就園前の LBW 児の母親を対象にしたサポートグループプログラムの開発と効果測定をおこなった。効果測定にもちいた養育スタイル尺度については、尺度作成と発達障害傾向を持つ親の特徴把握などを報告した。サポートグループプログラムは、日々の子育てと母親自身の振り返りを中心とする 6 回のベーシックプログラムと、NICU 入院など過去体験の振り返りをとりいれた 2 回のフォローアッププログラムから構成した。効果として抑うつ傾向や外傷体験様の症状の低下、一部の養育スタイルの改善がみられた。グループプログラムのみならず、実施場所やスタッフによる個別フォローなどグループ運営上の複合的な要因が効果をもたらしていると考えられた。

以上の結果を踏まえ、第 6 章では総括として、乳幼児期における LBW 児の発達プロセスと各領域への介入の有用性について考察するとともに、LBW 児を育てる母親への臨床心理学的支援技法および母子をとりまく地域中心型リハビリテーションの枠組みの活用について述べた。